



編集月旦 2015年4月号

★鳥にちなんでは「鶯歌燕舞」が、樹木にかんしては「桃紅柳緑」という四字成語があります。ことしの春、どれかに出会いましたか。わたしは新世纪このかた15年、この国の高齢社会に警鐘を鳴らしながら（少時、鳴らす手を休めて）、新たな春に希いを託して「鶯歌燕舞」を確認しています。本誌が春季のごあいさつに用いている「春山如笑」（山笑うは季語）には、温潤な陽気にうながされて、生きものがそれぞれに活動をはじめるようすが「笑う」ということばにとどめられていて、おおらかな気分になれます。

☆お気づきのように、本誌の掲載記事はあわただしく月ごとに入れ替えはしていません。月を経て新たな動きがあれば再掲しています。3分冊季刊誌に近いスタイルです。

★4月17日に、総務省統計局が昨年10月1日現在の人口推計を公表しました。4人に1人の65歳以上の高齢者（史上初の高齢社会の体現者）は3300万人に、割合は26%になっています。ここ数年は年間200万人が増えて100万人ほどが離世しますから、同じく4人に1人といつても“若い高齢者”が増えていることになります。

☆といって、定年になって、ほどほどの貯蓄をつくって年金にありついて、「やれやれ、これから自由の身」と思って、社会参加を閉ざして、「定年余生」のスタートをきる。これが社会的デフレーション（萎縮）で、経済的デフレーションはその一面の表現です。

☆「65歳以上の年齢別男女別人口表」のご自分の生年に印をつけてみてください。まだ若いことに気づくでしょう。と同時に「定年余生」ではとても生き切れない長い高齢期であることにも。いずれは背筋をのばした「現役長生」という意識への移行が必要です。

☆高連協の全国アンケートによれば、高齢者の97%までが「社会参加」を必要としています。内向きに自分、家族、親族、学友、同僚にかかわりを閉ざさず、地域デビューやテーマ型参加に一歩を踏み出して、「共生・共助の文化圏」での自己実現を図ること。

☆各自治体に「生活支援コーディネーター」が置かれ、地域高齢者による「協議体」が動きだします。地域デビューのチャンスです。高連協の代表でもある堀田力さわやか福祉財団会長は、新地域支援構想会議のリーダーとして新地域支援構想の制定に尽力し、全国の自治体をまわって、「助け合い」のしくみづくりに力走しておられます。講演やあいさつでわかりやすく政策の変更について解説されています。また地域でどんなかかわりがもてるかについて、『新地域支援 助け合い活動創出ブック』（さわやか福祉財団）でていねいに解き明かしてくれています。25年後の「定年余生」を恥ずかしくしないために。

★RISTEXの「高齢社会のデザイン」（3年間・15プロジェクト）は、お互いに情報を交換し合いながら、着実な「実装」の成果を生んでいます。各所の成果を集積するリソースセンターは、秋山弘子教授の構想での国際的貢献が想定されます。

★月刊丈風」の広域化の手始めとして、千葉県のみなさんに送らせていただきます。千葉県には「房総長寿社会憲章」（[房総長寿社会憲章1992年](#)）があります。世界十指にはいる海洋国家であるわが国の、太平洋ダイヤモンド・リングの一画にある千葉県の、大洋に面した南九十九里の一角から、「日本長寿社会」達成にむけた烽火のひとつを掲げています。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり、高齢者の課題であり、本誌の目標です。（編集人 記）

